

田地文子

食卓のない家 下巻



沿線地図

山田太一

作品社

食卓のない家 下巻

昭和五十四年四月二十日 発行
昭和五十四年十月十日 七刷

定価 九五〇円

著者 円地文子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部 東京03 三六―五二二
編集部 東京03 三六―四二二
振替 東京四一八〇八番

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

食卓のない家

下巻

目次

秋 風 行	傷 つ いた 獅子	父 と 子	謎	葬 花	落 ち る	凶
130	110	95	69	53	35	7

続 秋 風 行

146

赤裳垂れ引き

158

流れる日々

173

ハイジャック

186

空へ

201

緑の牧

236

あとがき

245

装画 三尾公三

食卓のない家 下巻

凶

その日、修が大学の帰りに母の病院を見舞った時、由美子はひどく不機嫌だった。いつもなら、息子の顔をみると、いそいそして話し出すのに、今日は、

「いらっしやい」

と冴えない声で言っただけで、書きかけていた習字の筆を離さないものである。この頃由美子は毎日が退屈でたまらないというので、医師のすすめもあつて書の稽古を始めていた。主に通信教授で、月に一回ぐらい師匠の家へ出かけて行くことを許されていた。

「習字は気持ちを落ちつかせるものだし、あなたは若い時分から私よりずっと字が巧かったじゃないの」

と喜和もすすめた。この頃姉の言うことにはともすると逆らい勝ちな由美子も、その時だけは素直に受けて、

「主人もそう言うてくれるのよ。おれも暇さえあれば、いっしょに習いたいなんて」と自慢そうに言った。

「ほんとにそうするといいわ。信之さんも仕事一点張りで、ゴルフも碌にしないんだもの……夫婦で書の稽古をして競争して見たら……」

と喜和は笑つて見せたが、由美子は顔を翳らせて、

「駄目よ、あの人は……全然遊びつてことが出来ないんだもの」

と投げ捨てるように言った。その日も喜和は珠江の結婚について由美子に話そうかと思って出かけたのだが、何となく言い出しにくい雰囲気でも口に出れなかった。

「珠江はいつたいいつまで札幌にいるつもりなんでしょうね。手紙一つよこさないで。もうそろそろ二ヶ月以上にもなるのに、何か向うで仕事でもなければ、そうそう友達のところにいられる筈はないでしょう。うちの方だって、いつまで留守にされては困ってしまうわ。いつそ私が帰ろうかしら」

由美子がそんな風にいうので、喜和は珠江のアメリカに行っていることをうち明けるどころではなく、うちの方は家政婦もいるし、自分も暇な折には見てまわっているから、心配しないで静養していてくれるようにと頼むように言って帰った。

修が来たのは、それから二三日経って後のことだったが、その間に思わぬ知らせが由美子の耳に入っていたことは夢にも知らなかった。

「これ、角田さんから頼まれて来た寝間着や下着だよ。これは昨日、研究所の人が箱根のお土産に、小田原で買って来た特別おいしい蒲鉾なんだって……お父さんに頼まれて来たよ」

修はひとりで喋っていたが、母親はそれに答えるでもなく、向うむきで椅子に腰かけたまま、習字の手本を見ながら、筆を動かしてつづけている。ちよっとおかしいなと修は思った。母親の病気の癖を彼も長い間に吞み込んでいた。

「何を習っているの。そんな難しい字、おれにはまるで読めねえや」

修は母親の手元を後ろからのぞき込みながら、甘えるように声をかけた。

「もの思へば沢の螢もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る……いい歌でしょう」

そう思ったかと思うと、由美子は今自分の手で書き上げた習字の紙を無造作に取り上げて、びりびりと引き裂き、屑籠へぽんと投げ捨てた。

「どうして捨てるのさ。うまく書けてたじゃないか」

修は呆れたように言ったが、実際にはこうした母親の咄嗟の気分の変化についてはよく知っているのさ、そら来たという感じの方が強かった。

由美子は息子の言葉には答えず、荒っぽく筆や硯を片よせて、こちらを向いた。

「修、お母さんの顔を見てごらん」

「何言ってるのさ。今までそっちを向いてた癖に、顔を見られる筈がないじゃないか」

修はげらげら笑って見せたが、由美子は真剣な顔で、

「眼をごらん……私の眼を」

と言って、自分も凝っと修の眼を見た。

「厭だな、催眠術にかけるつもり」

彼は笑いを止めないまま、わざと大きく見開いた瞳に、母の眼を見つめた。その笑いをこらえているおどけた表情を見ている由美子の眼から、突然涙が弾けるように溢れ出して来たのに修はびっくりした。

「どうしたの、お母さん」

「どうしたのじゃないわよ。あなた方は皆してお母さんを騙して……どうせ私を狂人だと思っているんだから……」

途中から由美子はわっと声を上げ、駄々っ子のように肩をゆすぶりながら泣きつづけた。修はおろおろして、どう慰さめていいか、分らなかった。

ちようどその時、薬の袋を持って、若い看護婦が入って来た。

「あら、どうなさったの、中原さん……坊っちゃんが見えたんで昂奮したんですか」

この種の患者に慣れている看護婦はさして驚いた風もなく、

「さあベッドに戻りましょうよ。もう少しすると、酒井先生の回診ですわよ」

と言った。酒井というのは「ハンサムな先生」として女の患者にも看護婦にも人気のある青年医師であった。由美子は時々、「あの先生、うちの長男にそっくりなのよ」などと言って、うっとりしている時があった。酒井先生の名をいうと、由美子は機嫌のよくなるのが常であったが、今日はいっこう効力が無かった。

「いいのよ、酒井先生なんかどうでもいいの。川北さん、私、家族に見捨てられたんです。主人にもこの息子にも、姉にも……私……私……」

言いながら由美子はまたしゃくり上げて泣いた。
ちやうどそこへ当の酒井が入って来た。

由美子が泣きわめきながら、話す恨みつらみの内容を綴り合せて見ると、娘が結婚してロスアンゼルスに行ってしまったことについて、親族の誰れもが自分に話してくれなかったという一点に絞られるのであった。

「私って者がここにいるのに……、珠江はあっちへ行く前に来た時だって何一つ言わなかったし、主人も姉も……この修だって、私を赤の他人のように扱ったんです。私は珠江の母親なのに誰れ一人、私を一人前の人間として扱ってくれないんだから……」

由美子の訴えとも、叫びともつかぬ泣きじゃくりの声は、主にそこへ入って来た酒井医師に向けられていた。

「ねえ先生、こんなことがあっていいんですか。皆が私を狂人扱いしているんです。ねえ先生、私はほんとうに狂人なんですか。私の眼には誰れの顔だって分るし、言葉だって理解出来るんです。それなのに……」

由美子の言葉は支離滅裂であったが、それ以上にそこにいる三人を当惑させたのは、そんな言

葉を口にしながら妙になまめかしい親しさで、酒井の手をとったり、彼の白衣の胸にしがみついたりするにも、荒らくれとばかり言われぬ媚態を見せていることであつた。

こういう発作は前にも時々起らないではなかつたが、今日は眼につくほど烈しいので、余り物事に関心を示さない修も、思わず眼を外らさずには居られないし、当の酒井も精神科の医師とはいふものの、まだ年期の入っていない若い男だけに扱いかねる様子であつた。

「まあ、落ちついて下さいよ。僕は精しい事情は知らないけれど、誰れも悪気があつて、あなたにお嬢さんの結婚のことを話さなかつたわけじゃないと思いますよ」

酒井は、^{お嬢さん}、取りすがつて来る由美子を抱くようにしてなだめているが、青年らしい羞恥が白い頬を薄赤く染めて、助けを求めるように、川北と修を見た。

「酒井先生の言われる通りだよ。誰れも、お母さんを騙そうなんて気はありません……」
と修がいうと、川北も奇妙なてれくささで、酒井の胸に顔を当てている由美子から眼をそらして、

「そうですよ。御主人だつて、お姉さんだつて、皆、あなたを淋しがらせないようにと、心配していらしたんです。そのことは田沢先生がよく御存じですわ」

と言つた。

「ね、部長にも後で来て貰いますから、よく、田沢先生から話をきいて下さい」

酒井がそういうと、由美子はいよいよ深く酒井の胸に顔を埋めて、首を振つた。その様子は頭はない子供が母親の胸に抱かれてむずかっているように、少しずつ気分が静まて行くらしいので、酒井はほつとして由美子の胸や背を撫でさすつてやつた。

「ね、安心して少しお休みなさい。僕はずつとここにゐるから……いつものあなたの好きな、いい夢を見る注射をしてあげましょう」

酒井は川北に眼で知らせながら、由美子を胸により添わせたままベッドのところまで行って、ゆっくりその身体を抱き上げその上に横たえた。

由美子は横になっても、まだ酒井の手を握ったままで、

「先生、こうしていて……ずっとこうしていて」

と甘えるように言った。酒井は由美子の頬を汚している涙を拭き取ろうと修に手で合図をしたが、修が傍へ寄って来て、ハンカチを母の顔に当てようとすると、由美子は烈しく首を振って、

「いや！ いや！ 先生拭いて」

と叫んだ。酒井も余儀なく修の手のハンカチを受け取って、由美子の頬の涙を拭きとってやった。

川北が帰って来て、無事に注射をすませたあと、二三分すると由美子は深い眠りに吸い込まれて行った。

「軽い睡眠薬だから、二三時間すると眼を覚めますよ。眠った後は極めて機嫌がいいから、大丈夫です」

酒井は無心に眠っている由美子の脈をとってから言った。

三人は黙ったまま、そっと病室を出た。

「誰れが君の姉さんの結婚のことを、お母さんに話したんだろう。君見当がつくかい」

酒井は修と川北の顔を見比べながらいった。

「僕、全然見当つかないな。親父と伯母さん以外、ここへ来る人と言えばたまに家政婦の角田さんが寄るくらいだけど、あの人は口止めされているからそんなこと言う筈ないもの……」

「おかしいねえ。病院の中でも言う人なんかいない筈だよ」

「ええ、勿論ですわ。この間中原さんがいらした時、いつまで隠しても置けないって部長さん

に話していらしたようですけど……」

そう言いかけて、川北は突然気がついたらしく、

「あ、あの人だわ……きつと」

と言った。

「あの人って誰れ」

と酒井が訊くと、川北は今日の昼少し過ぎに廊下を歩いて来るとき、由美子が若い女と話しながら病室の方へ行くのを見かけたというのである。

「私、静脈注射をしに行くところで急いでいたので、行き違っただけだったんですけど、パンタロンに中国風の袖無しを着た派手な感じの女の人でしたわ」

「ふうん、そんな格好の人、君、心当りがあるかい」

「さあねえ」

修は首をかしげていると、川北が、

「イヤリングをしていたわ。青い玉の先きについた細い鎖の……耳たぶでチャラチャラ音がしていたのだけ覚えている……」

と女らしいことを言った。

「青い玉のイヤリング……」

修は鸚鵡返しに言って、

「ああ分った……それなら多分あの人だ」

といった。

「あの人って誰れさ。君のうちに懇意な人かい」

酒井がきくと、修は断定的には言えないけれど、その耳飾りの主なら多分姉の友だちで、向

うへ行くまで親しくしていた伊能かつみのことであらうと言った。かつみは高校時代以来珠江と仲よしで、クラブ・ルナへ珠江を世話したのも、達也とかつみとの話あいの上のことであった。偶然ではあったが、彼女は学生時代からアルバイトにルナへ通っていたのである。

珠江が達也と結婚して、アメリカへ行くことになったとき、多分かつみにだけはそのことを打明けて行つたらうと修は言った。

「姉さんはまさかカッチャンが病院にいるお母さんに逢うことがあるなんて思わなかったらうけど、彼女はちよつとオッチョコチョイのところがあるから、顔を合わせたらベラベラ喋つたんじゃないかしら……」

修はそれほど困つたことも思わない風に言った。

「だつてかえつていいんじゃないかな。一時は大騒ぎするけれど、どうせいつまで黙つて置けることではないんだから……中原の伯母なんかそれを気にしていたんですよ。まあちよつとした手術みたいなものかな。親父だつて、ほつとするんじゃない？」

修の暢気すぎる話をきいていると、酒井も川北も自然に気がほぐれて来た。

「でもね、先生、おふくろは先生に抱かれてうれしそうな顔してたじゃありませんか。女の精神病患者は色情狂になると本に書いてあつたけど、先生、ああいうのにちよいちよい出逢うんですか。厭だろうなア」

修の口ぶりには自分の母親の異常な精神の動きを浅ましいなどと思つてゐる様子は少しも見えない。そのこと自身が、酒井にも川北にも味気なく思われた。

「精神科の医者をしていれば、あんなことはよくあるさ。職業のうちだと思つていれば、観察力が鋭敏になるプラスもあるというものだ」

酒井は臨床医らしく冷静に言つた。